

## ミステリアスな現地妻（ニヤイ）

— インドネシア民族意識の生みの母？ —

弘末雅士

東南アジア史を研究してきた筆者は、前近代の東南アジア社会が外来者に現地妻を提供した慣習に、近年関心を払っている。東南アジアには、古くから周辺世界の商人や旅行者が到来し、長期滞在するに至るものも少なくなく、一六世紀以降はヨーロッパ人の植民地支配者もこれに加わった。彼ら外来者は、二〇世紀に入り家族同伴が多くなるまで、ほとんどが単身赴任であった。そうしたなかで彼らは、地元の有力者より現地妻を持つことを勧められた。現地妻となった女性は、外来者と同居し、家事を司るとともに、その地の言語や習慣を教える役割を担った。外来者は必ずしも彼女と正式結婚したと認めただけではないが、現地社会は彼女を実質的な妻とみなした。

近代史観は、同棲を強いられた彼女らを、自由を奪われ、性的搾取をこうむった存在と位置づけてきた。彼女らは、一方で現地人有力者の傘下であり、他方で新たな同棲者の影響下におかれる二重の従属を強いられ、厳しい境遇におかれた。しかし、現地人と外来者という異なる集団を仲介するために、現

ミステリアスな現地妻（ニヤイ）（弘末）

地人有力者にせよ外来者の主人にせよ、二元的に彼女らを影響下におきにくかった。そのため彼女らは、時としてミステリアスな存在となった。

インドネシアにおいてもオランダ人や中国人らは、多くが現地人同棲者を有した。一九世紀終わりの統計では、オランダ領東インド（現在のインドネシア）在住のヨーロッパ人の約五割がこうした同棲者を持った。東インド植民地軍のなかの一人前後のヨーロッパ人兵士の間でも、約二五パーセントが現地妻を有した。彼女らは、現地語でニヤイ（ねえさん）と呼ばれた。元来この語は、女性に対する敬称であった。もともと東南アジア社会で広く共有されていた慣習であり、一九世紀の終わりまで現地社会も、こうした女性にさほど高い関心を払わなかった。

こうした存在に人々が積極的関心を払い始めたきっかけの一つが、ヨーロッパにおいて一八七〇年代から影響力を持ち始めた性モラル向上運動である。スイスやイギリスのクリスチャンの間で始まったこの運動は、公営の売春宿の存在や正式結婚を伴わない男女の同棲をきびしく批判した。やがて運動はオランダでも支持者を獲得し、東インドにおける公営売春宿と現地妻の慣習は、その批判の主要なターゲットとなった。本国の世論を無視できなくなったオランダ政庁は、二〇世紀はじめにオランダ人官僚がニヤイをもつ習慣を自粛させはじめ、一九一三年に植民地軍のヨーロッパ兵士がニヤイをもつことを禁止した。さらに同年オランダは、東インドにおける公営売春宿を廃絶した。

またニヤイの存在を現地社会に広く注目させたもう一つのきっかけは、一九世紀終わりから現地語マレー語の新聞や小説さらには演劇に彼女らの話が盛んに登場し始めたことであった。一八五四年の法令

により、東インドにおいて条件付きであるが出版の自由が認められた。まず欧亜混血者や華人がバタヴィアやスラバヤ、スマランなどの都市で新聞を発行し始め、二〇世紀初頭にはインドネシア人の編者も登場した。また欧亜混血者によって始められた新たな大衆演劇も、一八九〇年代以降主要都市で盛んになった。これらの新聞に掲載された小説や演劇の演目のなかで、もつとも人気を博したのが、ヨーロッパ人のニヤイをテーマとしたものであった。作家だけでなく読者と観客も、ニヤイの話をとおして、ヨーロッパ人と現地人の混在する当時の植民地社会全体をイメージでき、また男女の複雑な関係を階級的な差異を超えて楽しむことができた。正式な妻でないニヤイの境遇は、流動的であり、また異なる集団間を行き来することから、きわめてミステリアスな存在となり、人々の関心を集めた。

この時期人気を博したものとして、『ニヤイ・ダシマ物語』（一八九六）という作品がある。欧亜混血者のG・フランシスが、西ジャワでの一九世紀はじめの実話をもとにした作品で、あらずじは以下のようになる。主人公のダシマは、ボゴール近郊の村の女性で、幼い頃からイギリス人農園経営者のエドワードの館に奉公に出た。ダシマは働き者で、成長すると美しくなり、主人に気に入られ、そのニヤイとなった。ダシマは、エドワードに正妻同様にかわいがられ、彼との間に娘ができ、財産も分けてもらい、裕福で幸せな生活を営んでいた。八年にわたるニヤイとしての暮らしの後、エドワードが勤めをバタヴィアに移したので、ダシマもバタヴィアで暮らし始める。

バタヴィアにきて二年たった頃、彼女の裕福ぶりに目をつけた近郊のイスラーム教徒の華人サミウンは、あらゆる手段を弄して、彼女と接触する機会をさぐる。サミウンの仲間の老女マ・ブユンは、エド

ミステリアスな現地妻（ニヤイ）（弘末）

ワードの館で下女となり、ついにダシマの注意を惹くことができた。マ・ブンは、正式結婚でないエドワードとの暮らしが「姦通の日々」であり、イスラームの教えに従い本来の暮らしに帰るべきことを彼女に説く。心が揺れ始めたダシマは、週二回イスラームの教えを学び始めた。ダシマがサミンウンの家に招かれたとき、彼女は忘れかけていた現地人社会の暮らしを思い出し、懐かしさとともに、エドワードとの生活に疑問を持ち始める。ダシマはついに、現在の暮らしと決別する決心をする。ダシマから離別を告げられたエドワードは、彼女にクリスチャンに改宗し、正式結婚しようと訴える。しかしダシマはもはや聞き入れず、エドワードの家をあとにし、サミンウンの第二婦人となる。

しかし、彼女の財産目当てであったサミンウンとの結婚生活はうまくいかず、ダシマはふたたびエドワードの家に帰ろうとする。その道中にサミンウンの一団は彼女を殺し、チリウン川に投げ込み、金品を略奪する。そうとは知らないダシマの娘が、女中たちとともに屋敷裏のチリウン川に水浴びに行ったとき、ダシマの死体が流れ着く。その亡骸は、魚や鰻の餌食となることなく、何やらもの言いたげな表情でそこに浮かんでいた。

現地人の伝承物語にも通じていたフランシスは、最後のダシマの亡骸が流れ着く話などに、その知識を活用した。この作品は、小説で評判になっただけでなく、演劇においても何度も上演された。興行主にとっては、客足が遠のいたときに『ニヤイ・ダシマ物語』を上演すれば、観客が戻ってくるありがたいものであった。ダシマがヨーロッパ人と現地人の両世界を揺れ動き、両者を橋渡しできず二者択一的にならざるをえなかった悲劇を綴った作品である。この時期の人気を博した他のニヤイ小説も、原住民

社会とヨーロッパ人社会の両者に板挟みとなり、揺れるニヤイの心情とその運命を描いたものが多い。元来二つの世界を仲介することを期待されている女性たちが、近代的個を持ち始め、その役割に悩み、自らの幸せとは何かを模索することを綴った作品群が登場したのである。

二〇世紀の時代は、外来系住民と現地人の亀裂をますます深めていく。一九一一年末、辛亥革命の成功に高揚した東インドの華人系住民に対抗して、原住民ムスリムが物心両面の発展を唱え、ジャワの地にイスラーム同盟（サレカット・イスラーム）を結成する。同盟は、ムスリム商人やイスラーム指導者、原住民ジャーナリストの活動に支えられて、短期間のうちジャワ全土に広がり、一三年のなかばには三〇万人の会員を有する団体となった。そして一四年にはジャワ島を越えて、東インドの島々に支部が設けられるに至った。インドネシア人の編者による新聞や機関誌の数が欧亜混血者や華人ものを凌駕し、「原住民」意識が人々の間にひろく共有されるようになった。各地で華人系住民とイスラーム同盟員との衝突が起こった。またイスラーム同盟の力を結集すればオランダの力をも凌ぐ、と唱える人々も現れた。さらに一九一七年のロシア革命の成功は、東インドにおける社会主義者の活動を活性化させた。イスラーム同盟内でインドネシア人社会主義者が影響力を強め、彼らは一九二三年同盟と袂を分かち、植民地支配からの解放を掲げたインドネシア共産党を翌年設立した。

イスラーム同盟が拡大していく過程において、現地人妻妾の問題は、オランダ人や華人を批判する格好のテーマとなった。一九世紀終わりに展開した性モラル向上運動の理念を、民族主義運動は植民地支配への対抗原理の一つとして活用した。原住民女性をニヤイとしたオランダ人や華人はきびしく非難さ

ミステリアスな現地妻（ニヤイ）（弘末）

れ、娘をそうしたムスリム以外の外来者のニヤイとして提供した人々は、同盟員になれないとされた。また社会主義者たちは、資本主義がインドネシア人女性をヨーロッパ人のニヤイにしたと唱え、彼女たちをその犠牲者とみなした。

一方東インドにやってくるヨーロッパ人や華人の数は、プランテーション企業や鉱山企業の発展とともに、二〇世紀に入っても増え続けた。性比のバランスは、家族同伴によって一九世紀に比べると幾分均等化した。一九二〇年の統計においてもヨーロッパ人の総数一六八、一四一人のうち男性が九三、四二〇人で、男の数が優っていた。インドネシア人女性がヨーロッパ人や華人の単身赴任者と同棲する現象は、減らなかった。東インドの諸都市では、華人や日本人、欧亜混血者らが経営するホテルやカフェ、カンティーンが外来者と現地人女性の出会いの場となった。

一九世紀終わりから二〇世紀初頭にかけて、欧亜混血者が先駆者となったニヤイをテーマとした小説の執筆は、一九一〇年代から二〇年代になると華人系作家が主導的役割を担うようになった。そうしたなかで、一九二二年に華人系作家Tan Jing Kangが出版した『ダイヤモンドのネクタイピン』では、ニヤイが幼なじみの中国人の主人に、中国人女性と結婚するようにアドバイスする。それにもとづき彼は中国人女性と結婚し、ニヤイと主人と妻との三角関係が崩壊することなく、三人はその後も幸せに暮らしたという。ナシヨナリストの推奨する同一民族間の結婚とニヤイの存在が、後者の才覚により矛盾なく進展したのである。一九二四年に結成されたインドネシア共産党は、農民層にも支持者を拡大し、一九二六―二七年には武装蜂起を試みた。蜂起はオランダによって弾圧され、共産党は解散させられた

が、その後一九二八年にはスカルノを党首とするインドネシア国民党が設立され、原住民色が強いインドネシア民族主義運動が展開した。少数派となる華人たちは、自分たちの居場所を模索しなければならなかった。

インドネシアは、日本占領期を経て一九四五年八月一七日に独立を宣言する。その後オランダとの独立戦争を経て、一九四九年にオランダはインドネシアへ国家主権を譲渡した。欧亜混血者を含めヨーロッパ人の法的地位にあった人々は、国籍の選択を迫られた。彼らの約八割がオランダ人国籍を取得し、インドネシアを去った。「洋妾」としてのニヤイも、一九五〇年代に外国系企業をインドネシアが接収したことにより、その役割を後退させていった。

こうした状況は、ニヤイの物語にも反映した。独立後一九六五年にインドネシア人アルダンによって書かれた『ニヤイ・ダシマ物語』では、ダシマが村の暮らしが好きであり、貧しさ故にヨーロッパ人のニヤイにならざるをえず、主人のことを愛せず、原住民社会に戻りたい気持ちを持つ女性として描かれる。一方ダシマの主人は、飲んだくれで、女たらしとして描かれている。彼はダシマが村人と接触することを認めようとしめない。ダシマは話し相手となってくれた館で働くマ・ブユンに相談し、ついにニヤイの暮らしをやめ、村に帰る決心する。ダシマはここでも、彼女の財産に目をつけたサミウンと関係を持つが、最終的に彼女を殺したのは、ヨーロッパ人の主人に雇われた殺し屋という筋書きになっている。先のフランスの作品においてダシマに同情的であったヨーロッパ人の主人は、ここでは悪玉となる。植民地主義の払拭を掲げたインドネシアの国民統合において、『ニヤイ・ダシマ物語』も変容したのである。

ミステリアスな現地妻（ニヤイ）（弘末）

しかし、国民統合の行き詰まりとともに、ふたたびニヤイは異なる角度から注目を浴び始める。一九六五年の九・三〇事件をきっかけに政権を奪取したスハルトは、スカルノ体制下で勢力を拡大した共産党を徹底的に弾圧した。三〇万人以上の共産党員やその関係者が殺された。党員ではなかったが、共産党の文化事業に関係したために、作家のプラムディア・アナンタ・トゥールも逮捕され、ブル島に一九六九年から七九年まで流刑となった。彼はその間に、一八九八年から一九一八年に至るインドネシア民族主義が台頭してくる時代を舞台とした小説を構想した。彼自身が、インドネシア民族主義とは何であったのか、自問自答したのである。最初の作品『人間の大地』（流刑後の一九八〇年に出版）には、主人公のミンケ（イスラーム同盟の創設を支えたジャーナリストのティルトアデイスルヨがモデル）に、大きな影響を与えるニヤイ・オントソロが登場する。

彼女は、オランダ人の主人（ヘルマン・メマレ）を補佐し、東部ジャワで農園経営を実質的に司る女性である。彼女は、流暢なオランダ語がしゃべれ、かつ東西世界の文学作品に通じた教養人であった。オランダ高等市民学校に通うミンケと異なり、彼女は学校教育を受けることなく、主人からの手ほどきと独学で、その知識や見識を身につけた女性として描かれる。彼女は、オランダ人の主人との間に二人の子供をもうけていたが、主人が二人を認知したことで、法的に彼女の子供でなくなる植民地体制に疑問を抱き始める。その後、オランダにいた主人の息子（マウリッツ・メマレ）がこの家に現れ、彼と彼の母親が無視されていたことで、父親を厳しく非難する。間に入ろうとしたニヤイ・オントソロは、原住民であるがゆえに、息子から相手にもしてもらえなかった。彼女は、オランダ人の実態に深く失望する。

それからは、二人の子供に財産を残してやれるように彼女は、農園経営にいつそう精を出す。彼女は、彼女の娘アンネリースに恋心を抱いたミンケに目をかける。ニヤイ・オントソロは、ヨーロッパ人であるが、欧亜混血者であるが、原住民であるが、対等に接触する。一方主人は、息子に見限られ、酒と女におぼれ、やがて亡くなる。ニヤイ・オントソロの二人の子供のうち長男も、ヨーロッパ人の法的地位にこだわり、母親や妹と折り合いが悪くなる。ミンケは、ニヤイ・オントソロと娘に深く関わり始め、娘と結婚する。

ところが、メマレの息子マウリッツがオランダの裁判所をとおして、死んだ父親の農園の相続権と、アンネリースとミンケの結婚が、ミンケが原住民であるために、無効であることを訴えた。植民地体制は、ヨーロッパ人と原住民の法的差異を設け、前者の優位を保障していた。またマウリッツが未成年のアンネリースの後見人になることを申し出たために、アンネリースはオランダに戻されることとなる。スラブヤの白人裁判所に出頭を求められたニヤイ・オントソロは、彼女がアンネリースを生み育てた母親であること、彼女の娘は結婚していることをはつきりと訴えた。ニヤイ・オントソロは、裁判官にも妻がありまた子供もあるのに道理を理解せず、ヨーロッパ人对原住民の図式にこだわるヨーロッパ人は、肌には色は白くても、心は黒く歪んでいる、とミンケにつぶやく。彼女はミンケにも闘うことを訴え、ミンケも仲間とともに、新聞紙をとおして原告の訴えの矛盾をつく。しかし、彼らの主張は容れられなかった。アンネリースはオランダに移されることとなった。闘いに敗れうなだれるミンケに対して、ニヤイ・オントソロは、「わたしたちは闘ったのです。力の及ぶかぎり、精一杯の誇りをもって」と最後に

ミステリアスな現地妻（ニヤイ）（弘末）

言葉をかける。

一九八〇年に出版させたこの作品は、初版一万部が十二日間で売り切れ、数ヶ月間で四万部を刊行した。インドネシア人の間でも、インドネシア民族主義を生んだものは何かというプラムディアの問いに、高い関心があったのであろう（ちなみに本書はスハルト体制の批判につながると判断され、八一年に発禁処分となった）。プラムディアが描くこのニヤイ・オントソロは、主人の手ほどきをもとに独学によってオランダ語を習得し、近代文明世界を理解する。しかし実際のヨーロッパ人は、近代文明世界が奉じる普遍的な人間的価値を理解できず、ヨーロッパ人对原住民の枠組みに固執していることを明らかにする。

この近代ヨーロッパの理念をとおして現実の植民地体制を批判していくことは、ナシヨナリストの姿勢に通じる。インドネシア民族意識は、高等教育を受けた現地人エリートたちが、近代ヨーロッパの政治思想を活用しながら植民地支配への対抗原理を構築するなかから誕生した。ミンケのモデルのティルトアデイスルヨは、原住社会の上層の出自で、高等教育を受けて著名なジャーナリストとなり、イスラム同盟の結成の際リーダー的な人物となった。プラムディアはそのティルトアデイスルヨのミンケを励まし感動させる存在として、ニヤイ・オントソロを登場させた。

こうした女性が実際にいたかどうかは、議論の余地がある。ただし、民族主義運動が台頭する過程において、高等教育を受けられる境遇になかった市井の人が、自らの才能と努力をとおして、高等教育を受けたエリートに優るとも劣らない世界観や植民地支配への対抗原理を構築した事例は、インドネシ

アだけでなく他の地域でも、好んで取り上げられてきた。一般大衆と広く理念を共有できることを理想とするナシヨナリストたちにとって、こうした存在は欠かせないのである。

プラムディアの作品でニヤイ・オントソロはナシヨナリズムを生み出す役割を託されたが、外部社会と現地社会の橋渡し役のニヤイは、ナシヨナリズムの母となりうるとともに、両者を多様に関係づける存在であることに気づかされる。ニヤイの存在が問題視されなかつた一九世紀終わりまで、東インドにおける現地人とヨーロッパ人との関係は、比較的安定していた。また民族主義運動が活発に展開した二〇世紀前半期でも、現地社会と外来人コミュニティを二者択一的にとらえなかつたニヤイも少なからず存在した。そうしたニヤイたちも、多くが両社会の間を揺れたであろう。どちらか一方を選んだ彼女らに小説やナシヨナリストは注目しがちであるが、そうでない彼女たちも、生きていくために、少なからぬエネルギーと知恵を要したのである。近代国民国家における男女規範の見直しがなされている今日、こうした現地妻の事例は、東西交渉史研究のみならず、ジェンダー研究や男女関係の歴史研究に、興味深い材料を提供してくれるように思われるのである。

(本学文学部教授)